

主張と真理

——フレーゲの場合——

赤 星 慶 一

1 フレーゲと真偽

フレーゲは、語に意義と 意味 を認めた。フレーゲの表現に従えば、我々は
Sinn Bedeutung
 記号によって意義を表現し記号によって記号の 意味 を表示するのである⁽¹⁾。

意味 はいわゆる対象とってよいが、単称名辞の Bedeutung のことである。
Bedeutung
 そして表示されたものの与えられる様態はその記号の意義の中に含まれるので
Sinn
 ある⁽²⁾。表象と直観は主観的なものであり、意義や 意味 は客観的なものであ
Sinn Bedeutung
 る⁽³⁾。また語は意義を持たず 意味 のみを持つことはあり得ないが、意義を持
Sinn Bedeutung Sinn
 ち 意味 を持たないことはあり得る。
Bedeutung

では文についてはどうだろうか。フレーゲによるとまず、文には思想が含ま
 れている。これは客観的なものであり、かつ、多数の人の共有財産となり得る
 営為の内容のことである⁽⁴⁾。すなわち伝統的には 命題 と呼ばれて来たものと
proposition
 ほぼ等しいが、これが意義である。そこでフレーゲは次のように論を進める。
Sinn

文の 意味 はいかなるものであろうか。そもそも、そのようなものを問題
Bedeutung
 にする必要があるのだろうか。ことによると、一つの文は全体として意義は
Sinn
 持つが、意味 は持たないと言うことではないだろうか。少なくとも我々は、
Bedeutung
 意義は持つが 意味 は持たない文成分があるのと同様に、文全体についても
Sinn Bedeutung
 そのようなことが生ずるということを当然と考えることが可能である。そし
 て 意味 を持たない固有名を含む文はその種の文となるであろう。……いず
Bedeutung

れにせよ、ここで名前の 意味 にまで拘泥することは余計なことであるかもしれない。なぜなら、思想の段階にとどまるかぎり、意義のみで十分であるからである。すなわち、文の意義、すなわち、文の思想だけが問題になっているのであれば文成分の 意味 まで考慮する必要はないであろう。なぜならば、文の意義を考える時には、文成分の 意味 ではなく、その意義のみが考察の対象となり得るからである。……いずれにせよ文成分の 意味 を求めて努力するということは、文そのものに対してまた一般的に 意味 を認め、それを求めていることの証である。思想というものは、その思想の諸部分の一つが 意味 を欠いていると我々が知るときただちにその価値を失う。従って、我々が文の意義に満足することなく、文の 意味 が何であるかを問題にするということは正当なことであろう。しかし、そもそも我々が固有名の一つ一つに意義のみならず 意味 もあるということを何故期待するのだろうか。……それは、我々にとって思想の真理値が問題になるからであり、また、その限りにおいてである。……真理の追究はつねに我々が意義から 意味 へ進むことを促すものである⁽⁵⁾。

こうしてフレーゲは文の真理値をその文の 意味 として認めざるをえなくなると結論する。すなわち文の真理値とはその文が真であったり、偽であったりするという事情である⁽⁶⁾。この真理値が 意味 であり、対象であり客観的なものである。

しかし真ないし偽であるのは文であり、語や文の意義と 意味 が問題になるのは真理との関係においてであると言われるが、真偽の意味がはっきりしないようにおもわれる。フレーゲは真偽をどのように考えていたのだろうか。

2 真理の定義

対応説、整合説、実用説、余剰説などさまざまな真理論がある。また、我々はとにかく真理について日常語っているのである。我々が真理について語ると

めには、何らかの真理についての共通認識、真理の定義があるのではなかろうか。

フレーゲによると、「真」という語の内容は全く独特であり、定義不可能であるようであると述べている。それはどのような意味においてであろうか。フレーゲの議論を見ることにしよう。

フレーゲは「真」と言う語を客観的な真理に限定して次のように言う。

この語は「真実の *wahrhaftig*」あるいは「真理を愛する *wahrheitsliebend*」の意味で用いられてはならない。また芸術における真理が話題にされる時や、さらには真理が芸術の目標と呼ばれる時や、芸術作品の真理あるいは真なる感情について語られる時に見られるような仕方でも用いられてはならない。また、「真」という語がその本来の、純粋な意味において理解されるべきであることを知らせるために、この語をまた他の語の後に置く用法でもない。我々が考えているのは、それを認識することが、科学の目標であると言われる類の真理である⁽⁷⁾。

具体的には「真」ということでフレーゲは何を考えているのだろうか。それは、「【雨が降っている】⁽⁸⁾は真である」、「【地球は太陽の周りを回っている】は真理である」、「【ピタゴラスの定理】は真理である」という場合の「真理」という言葉の用法ではなくて、【雨が降っている】であるとか、【地球は太陽の周りを回っている】であるとか、【ピタゴラスの定理】のようなことがらであると考えられる。フレーゲの言う真理は個別的に成り立つ真理でなく、永遠の真理のような理想主義的存在である。フレーゲは一般には真理が次のように考えられているという。

- ① 「真」という語は、言語的には性質語のようにみえる。
- ② 真理が、絵画や、表象や、文や、思想について述べられているのがわかる。
- ③ 表象もそれ自身では真とは呼ばれず、それは何かと一致するはずだとい

う意図を顧慮してのみ真と言われるのである⁽⁹⁾。

①については後に言及するが、フレーゲが③で考えていることは、表象と実在との一致、知性と事物との合致、と言う言い方であらわされる真理の対応説であろう。対応説に対する反論は、いくつかあるが、これに対するフレーゲの批判点は、第一に、一致は関係であるが、これは「真」という語の用法に矛盾する。この語は、関係語ではないし、また、あるものが別のあるものと一致するはずの、当の別のものへの示唆も含んでいない⁽¹⁰⁾。つまり、「～にとって真」という言い方はできず、表象が何の表象であるかがあらかじめわかっていなければ較べようがないのである。

第二に、一致が実際に完全なものであり得るのは、一致すべきものが相等しく、少しも異なったものでないときに限るのである。表象と事物を重ね合わせることは、この事物がまた表象でもあるときに可能であるにすぎないであろう。しかし、真理を表象と事物との一致と定義するとき、人々が絶対に意図していることではなく、実在と表象が異なっていることがまさに本質的なことであろう。すなわち、ライブニッツを引き合いに出すまでもなく、同じ物ならば区別も付かず、従って一つの物と言うのである。

第三に、定められた点において、表象と実在とが一致していると言うことが「真」であるかどうか、我々は調べなければならないであろう。なんらかの点、つまり表象と実在の点で一致が成り立つならば真理は成り立つと定めたとしても、どういう観点を取るのかが問題であり、そのある観点において一致していることが「真」であるのかどうかを再び調べなければならないのである。

最後に、そもそも定義というものが「真」であるのかどうかという無限循環に陥り、真理を定義しようとする他のあらゆる試みもまた失敗するのである。

しかし例えば我々が絵に関して真理を述べるときにはやはり、他のものと全く独立にこの絵に属する性質を述べるものでないことも明らかである。従ってやはり、この絵とは全く別のものを念頭に置き、この絵がこの別のものとなんらかの仕方では一致すると言おうとしているのである。従って、

「私の表象はケルン大聖堂と一致する」というのは文であり、問題になるのはこの文の真理である⁽¹¹⁾。

絵や表象、実在について真理を語っていたものが今や、文の真理を考えればよいのである。こうして真理の担い手をフレーゲは文に求める。

3 真理の性質

さてこうしてフレーゲは真理の担い手を文に求めたが、文とは何であるのだろうか。語と文の相違点はどこにあるのだろうか。フレーゲによると、我々が文と呼ぶものは一続きの音であるが⁽¹²⁾、文は意義を持っていなければならない⁽¹³⁾。「ソクラテス」、 $【2+3=5】$ 、「これは丸い四角である」などは全て意義を持つ。しかしこれらが全て文とは言えない。意義を持つ音の連続はどれもが文という訳ではない⁽¹⁴⁾。我々は文を真と呼ぶときには文の意義のことを考えているのである⁽¹⁵⁾から、思想は文の意義であり⁽¹⁶⁾、思想は真理が問題になり得るもののこと⁽¹⁷⁾である。従って、「ソクラテス」、「自由」などは文や思想ではないということになろう⁽¹⁸⁾。「これは丸い四角である」は意義を持つが思想ではないのである。

思想が性質であるかどうかについてはフレーゲはどう考えているのだろうか。まず、偽なる思想、真なる思想がある⁽¹⁹⁾。従って真偽は思想の性質のようなものである⁽²⁰⁾。しかし思想は文の意義であるのだが、文の意義が全て思想であるのではない⁽²¹⁾とフレーゲは主張する。つまり、文は全て意義を持つ。しかし、全ての文が思想を持つわけではない。なぜならば、フレーゲは文の種類を区別し、副文や、命令文、願望文、嘆願文などには意義を認めるのだが、その意義は思想とは呼ばない⁽²²⁾のである。真理が問題にならないからである。また思想は知覚できず、非感覚的なものである⁽²³⁾。「昇っている太陽」は知覚可能である。しかし『太陽が昇っている』は知覚不可能な対象である。従って知覚可能な「昇っている太陽」を文にした『太陽が昇っている』は知覚可能であ

り、真理が問題となる思想を含むのである。従って、真理は感官印象に基づいて認識されるが、「赤い」のように知覚できる性質ではない⁽²⁴⁾。

ところで、先に挙げた①の真という語が性質語と言うことについて言えば、フレーゲによると、思想の一つの性質は真理であるが⁽²⁵⁾、思想に真理という性質を添えても、それによってこの思想には全く何も付け加わらないように思われる⁽²⁶⁾。「 $2+3=5$ 】」といっても、「 $2+3=5$ 】は真である」といっても同じようである。これは先にフレーゲが真という語の用法として取り除いておいたものであるが、もう一つの性質、偽についてはどうだろうか。「 $2+3=4$ 】」と「 $2+3=4$ 】は偽である」を較べれば、真偽が単に性質でないのは明らかである。

4 「思想」と「表象」

次に、語と表象と意義との関係についてフレーゲは、望遠鏡による巧みな比喩を使っているが、思想は表象なのだろうか。フレーゲは次のような問いを立てる。

最初にあの人が述べ、次にこの人が述べることはそもそも同じ思想なのか。思想は木のように知覚可能なものではないが、木のように振る舞うのだろうか⁽²⁷⁾。

つまり、思想は同一性を保てるのだろうか、あるいは思想は主観的なものなのか、客観的なものなのかということである。フレーゲはまず、外的世界と内的世界を考え、内的世界の中で、決断を除くものを表象とよんでいる⁽²⁸⁾⁽²⁹⁾。そして表象は外的世界とどう違うかについて次のようにまとめている。

- ① 知覚不可能
- ② 表象は意識内容である
- ③ 担い手を必要とする

④ あらゆる表象は一人の担い手を持つにすぎない⁽³⁰⁾

これが、表象が外的対象と異なる点である。逆に言えば外的世界の特徴としては、

⑤ 知覚可能

⑥ 超越である

⑦ 担い手はいらない

⑧ 一つの外的対象はあらゆる人にとって認識される

ということになる。従って、①が成り立ち、思想は感官によって知覚することはできない点で表象と一致する⁽³¹⁾。②と③は成り立つ場合もある。そして④の点で思想と表象とは異なる。また⑤は成り立たず、⑥はそういう場合もあり、⑦が成り立ち、思想は意識内容のように担い手を必要としないという点で外的世界と一致⁽³²⁾し、⑧も満たすであろう。従って、思想は外的世界のものでなければ、表象でもない第三の領域である⁽³³⁾。

5 「思想」と「主張」

さて、先にフレーゲは文の種類を区別していることをみたが⁽³⁴⁾、真理について言えば、真理が問題になるのは、何かを伝達するか、主張する文である⁽³⁵⁾。そして、あらゆる主張文は文疑問を構成することができる⁽³⁶⁾ことから、

疑問文＝思想＋要求

主張文＝思想＋主張

のように考察可能であるとする⁽³⁷⁾。疑問文も主張文も同一の思想を含むのである。その違いはどこにあるのかと言えば、まさに要求と主張という形式にある。フレーゲによれば、主張という形式に「真」がある⁽³⁸⁾。ある文を主張すると言うことはその文が真だということに他ならない。従って、「真」という語が用いられているかどうかは些細なことであり⁽³⁹⁾、「真理」と言う性質を添えても何もつけ加わらない⁽⁴⁰⁾のである。

このことから、思想について、あるいは、我々と思想の関係についてフレー

ゲは次のように結論する。

思考する際我々は思想を生み出すのではなく、それを把握するのである。なぜならば、私が思想と名付けたものは、言うまでもなく真理と最も密接な関係にあるからである。私が真と認めるものについて、私はその真理を私が承認することとは全く独立に、さらにはそのことを私が考えることからさえも独立に、それは真であると判断するのである。……事実とは何か。事実とは真なる思想である。……思想の真理が時間を超越しているからである⁽⁴¹⁾。

フレーゲにとって思想とは要求や主張に中立的で客観的なものである。その上、思想は時間を超越して変わらず、現実的なものではない。しかし、【ソクラテスは 200 才まで生きていた】は偽なる思想であるから事実ではないにしても、【雨が降っている】が真であり得るのは、発話の時も思想の表現に含まれるからである⁽⁴²⁾。もちろん、場所等の細かい規定も含まれるのであろう。しかしこの思想がいったん真であれば 100 年後に言われようと、200 年後に言われようと真であることには変わりはない。従って、「真である」における現在は、発話者の現在を指すのではなく、無時間制の時称である⁽⁴³⁾と言われるのである。しかしながら、私にとって把握されることもなく、また誰にも知られることもなく、それでもなお思想が存在するとすれば、思想を把握することによって、私はこの思想に対してある関係に入るのであり、またこの思想は私に対してある関係に入る⁽⁴⁴⁾のは時間制と関わり合うことによって⁽⁴⁵⁾でなければならない。

こうして思想と真偽が一体のものなので、次のようになろう。

- ① 【 $2+3=5$ 】 ………真なる思想
- ② 「【 $2+3=5$ 】」 ………真なる思想の主張⁽⁴⁶⁾
- ③ 「【 $2+3=5$ 】」ということ ………主張を取り除く
- ④ 「【 $2+3=5$ 】」ということは真である

この場合、①と③、②と④は等しくなる。すると偽である思想の場合は次のようになる。

- ⑤【 $2+3=6$ 】…………偽なる思想
- ⑥「【 $2+3=6$ 】」…………偽なる思想の主張
- ⑦「【 $2+3=6$ 】」ということ…………主張を取り除く
- ⑧「【 $2+3=6$ 】」ということは真である

しかし「思想」と「真理」は一体化しているとも、両者同一だと言うことは⑥と⑧のように判断することはできなくなる。偽である思想は無限にあるが、それを偽と認めることは判断ではないのだろうか。フレーゲに沿って考えてみよう。フレーゲは次のような区別を立てている。

- I ある思想を把握すること……考えること
- II ある思想を真と認めること……判断すること
- III この判断を表明すること……主張すること⁽⁴⁷⁾

IIで述べられているように、ある思想を真と認めることが判断であって、ある思想を偽と認めることは判断とはならない。従って主張もできない。日常的、常識的観点からするとこのことは極めて奇異に思われる。我々は偽なることも主張しているのである。すなわち日常的には、偽なる思想も偽と知らずに主張している。ところがフレーゲによると真なる思想しか主張できないことになる。これは何故かと言えば、独語の判断は urteil 命題 proposition のことであるが、フレーゲの判断は違うからである。しかしどうすればある思想を真と認め判断することができるのかについてははっきりせず、とにかく⑥と⑧のように述べることはできないのである。

6 結 語

フレーゲは真理は定義不可能であると考えたが、思想と真理が一体のものであるならば、真理の定義は思想である。すなわち、真理は思想である。しかし真理が客観的対象であり、実在であるならば、文脈的定義に関する限りは困難

である。なぜならば、定義されるものが独立の対象であることを示さないからである。

こうした真理の本質は主張という行為にも求められるが、真理は存在するものであり、認識、行為の次元にも関わるものであり、主張という行為によって価値と関わるのではないか。フレーゲは真理値を客観的存在として扱うのであるが、その存在形態は価値であり、価値の表現が真理値である。

注

- (1) 'Über Sinn und Bedeutung,' Ignacio Angelelli (Hrsg.), *Kleine Schriften*, (1967, Hildesheim), p. 147.
- (2) *ibid.*, p. 144.
- (3) *ibid.*, p. 145.
- (4) *ibid.*, p. 148. note 5.
- (5) *ibid.*, p. 149.
- (6) *ibid.*, p. 149.
- (7) 'Logische Untersuchungen,' Ignacio Angelelli (Hrsg.), *Kleine Schriften*, (1967, Hildesheim), p. 343.
- (8) 【 】で囲まれた部分はフレーゲの思想を表すものとする。
- (9) *ibid.*, p. 343.
- (10) *ibid.*, p. 343.
- (11) *ibid.*, p. 344.
- (12) *ibid.*, p. 344.
- (13) *ibid.*, p. 344.
- (14) *ibid.*, p. 344.
- (15) *ibid.*, p. 344.
- (16) *ibid.*, p. 344.
- (17) *ibid.*, p. 344.
- (18) 「ピタゴラスの定理」は語のようであるが、実は思想を含んでいる。なぜならば、「斜辺の自乗は他の二辺の自乗の和に等しい」という文の名前だからである。すると例えば「自由」や「愛」のごときものも思想を含むと主張できるかもしれない。
- (19) *ibid.*, p. 344.
- (20) *ibid.*, p. 345.
- (21) *ibid.*, p. 345.
- (22) *ibid.*, p. 345.

- (23) *ibid.*, p. 345.
- (24) *ibid.*, p. 345.
- (25) *ibid.*, p. 345.
- (26) *ibid.*, p. 345.
- (27) *ibid.*, p. 351.
- (28) *ibid.*, p. 351.
- (29) 決断を除くのは行為に関係するからであろうか。
- (30) *ibid.*, p. 351–352.
- (31) *ibid.*, p. 354.
- (32) *ibid.*, p. 354.
- (33) *ibid.*, p. 354.
- (34) *ibid.*, p. 345.
- (35) *ibid.*, p. 346.
- (36) *ibid.*, p. 346.
- (37) *ibid.*, p. 346.
- (38) *ibid.*, p. 347.
- (39) *ibid.*, p. 347.
- (40) *ibid.*, p. 347.
- (41) *ibid.*, p. 359.
- (42) *ibid.*, p. 361.
- (43) *ibid.*, p. 361.
- (44) *ibid.*, p. 361.
- (45) *ibid.*, p. 361.
- (46) 主張とはフレーゲがトという記号で表したものである。
- (47) *ibid.*, p. 346.

参考文献

野本和幸「フレーゲの言語哲学」1986, 勁草書房

坂本百大編「現代哲学基本論文集1」1986, 勁草書房

G・フレーゲ著, 藤村龍雄訳「フレーゲ哲学論集」1988, 岩波書店

——大学院研究員——